



班員:後藤 奏音 谷川 大空人 高橋 奏太 岩田 玲奈 三重野 優育

指導者:森田 康平先生 川上 真美先生 コーチ:水永 正憲 様

研究の動機

学力を上げたいと考え、好成績の人たちに共通する点を調査したところ、学力の高い人のほとんどはポジティブ思考や向上心があるなど、自己肯定感が高いという共通点が導き出された。そこで、学力と自己肯定感の結びつきを研究することにした。

研究の目的

とにかく学力を上げたいから！！！！！！！！！自己肯定感が高い生徒は学力が高い傾向にあると思いその関係がどのように形成されるか、また具体的にどのような要因が影響を与えるかをこの研究で明らかにしたい。

先行研究

Rosenberg自尊感情尺度という、自己肯定感を測定するアンケートを用いて、東北大学が研究を行っていた。そのアンケートでは性別による自己肯定感の差はさほどなく、ハピネス、ネガティブ、ポジティブといった環境によって左右される事がわかった。この研究を踏まえて、進学校という環境下で自己肯定感と学力のつながりを明らかにしていきたい。

研究方法

*自己肯定感は自らの在り方を積極的に評価できる感情、自らの価値や存在意義を肯定できる感情と定義する。

①学年全体に自己肯定感が高い人を見つけるため自己肯定感・生活習慣についてのアンケートを取る。

②アンケートから自己肯定感が高い人を分析し、アンケート内から共通点を見つけ出して、自己肯定感と成績の相関の原因を考察する。

必要な道具

自己肯定感について書かれている本(知識の為)



参考文献

<https://tohoku.repo.nii.ac.jp/record/3638/files/1346-5740-2010-58%282%29-257.pdfs>

仮説

自己肯定感が高い人は、やる気や自信に満ちあふれているが、もともと学力が高い訳ではない人もいると考えている。答えの正誤にこだわらず積極的に行動することで、結果的に学力が伸びていると思う。

結果

アンケート結果から、自己肯定感が高いと判断できた人と低いと判断できた人の学習時間はさほど変わりないことがわかった。また、自己肯定感の低い人のほうが、現状に満足していないと回答した割合が多かった。逆に自己肯定感の高い人のほとんどは、現状に満足していると回答していた。のことから、自己肯定感の低い人のほうが向上心が高いと読み取れる。よって、私たちが立てていた仮説は否定されることとなる。

考察

自己肯定感が高いと学力も比例して高くなるというデータは取ることができなかったため、私たちの研究からは相関関係を見つけることはできなかった。しかし、学力が高い人が皆たくさん時間勉強に費やしているわけではない。勉強時間が少くても学力が高い人もアンケートから見受けられ、その人たちのほとんどは自己肯定感が高いというデータを見つけることができた。のことから、視点を変えてみるとことによって自己肯定感と学力の結びつきを見つけることができると考えている。

謝辞

私達の研究に半年間熱心にご指導していただきありがとうございました。私たちが研究方法や内容に迷走していたとき、何度も助言していただきました。ここに水永正憲コーチに感謝の意を評します。